

新世紀ミュージアム

中国の歴史と芸術をおしみなく紹介する国立の博物館。常設展示のなかに一カ所、アフリカ芸術を紹介するコーナーがある。なぜここにアフリカ芸術の展示があるのか。その理由には、世界の経済状況が関係しているようだ。

中国の首都北京に行った。天安門広場から北側の天安門を望むと、おなじみの毛沢東の肖像がかかっている。同じ位置から東側を望んだところに、中国国家博物館がある。

同じ地区にある故宫博物院や毛主席記念堂と並んで、この中国国家博物館も、北京観光の要所である。中国国民も海外旅行者も身分証明書を示せば無料で入れるが、来館者があまりに多いため、入場の手前のセキュリティチェックで延々と列をつくらなければならぬ。

殿堂と形容したくなる建物は、二〇一年にリニューアルしたもので、建物の総面積は二〇万平米近い。展示面積の割合は不明だが、仮に一割だとしても、みんぱくの本館展示の二倍以上におよぶ。展示場の数も四〇以上にのぼるといふ。世界有数のマンモス級博物館といつてよい。

重なって見える。

現代アフリカを民族誌的に描き出すことよりも、これまでの文化史におけるアフリカのインスピレーションの役割を知らしめることが役割なのだろう。その証拠に、展示されたものの素材はことごとく耐久性の高い木材や金属で、植物繊維や化学繊維でできた布やバスケットなど、もっとも身近な生活用品



美術展示あるいは民族誌展示「アフリカ彫刻芸術傑作展」

は展示されていない。それにもかかわらず、みんぱく同様に露出展示の手法を採用していて、アクリル・ケースなどの覆いが来館者とのあいだにないため、古美術店にありがちなおどろおどろしさが直接的に伝わってくる。要約すれば、中国国家博物館のアフリカ展示は、広大な建物のなかにあって異質な雰囲気放っている。とはいえ、その展示の重要性は、中国の人たちにとって決して小さくないと思う。その価値はおそらく、まったく数の来館者にアフリカの一面を開陳して見せたことにある。アフリカ展示室は、出入口がエスカレーターを降りたところのすぐ近くに位置することもあり、他の展示室に勝るとも劣らない数の人たちを招きいれている。北京に展示されたアフリカは、ヨーロッパ人が好んだプリミティビズムを強く反映しているように思えるが、その視野に収まりきらないアフリカの現実がやがて中国の人たちをたらえていくと期待したい。

なかに入ると、アヘン戦争の屈辱から現代の栄光にいたる現代史展示、中国の宇宙開発に関する科学展示、そして彫刻や青銅器、陶器、古銭といった各種のアンティーク展示などが常設されている。科学展示やアンティーク展示は日本の科学博物館や美術館の雰囲気によく似ているが、現代史展示は独特の文言や音響効果で情緒を喚起するしつらえになっており、日本の博物館展示にはあまり類例がない。日本が侵略者側に立っていることを残念に思う人もいるだろうが、博物館好きなら訪れてみる価値があるように思う。

アフリカのインスピレーション

どっぶり中国文化に浸れるこの場所に、じつは一カ所だけ、常設の異文化展示(民族誌展示)がある。それが「アフリカ彫刻芸術傑作展」である。謝燕申氏が寄贈したアフリカン・アートの



中国国家博物館の前で入場を待つ人々



現代史展示「復興の路」(掲載写真はすべて2017年に撮影)

コレクションから五〇〇点あまりが選別され、仕切りのない大部屋に展示されている。ほとんどが木製あるいは金属製の彫像で、民族誌的な説明はほとんどない。等身大サイズのものも多く、来館者の群れとは異質な生きまものが部屋で肩を寄せあっているようにも見える。その怪しげな雰囲気は、現代中国人が見出したアフリカというよりも、二〇世紀フランスのキュビストやシュルレアリストたちが愛したアフリカに

芸術から見る世界経済

わたしがこのように思うのは、今やアフリカのどの国へ行っても、中国の人たちが旺盛にビジネス活動を展開しているからだ。二〇世紀初頭から、アフリカに渡った中国人の数はけっして少なくなかったものの、二一世紀の大規模移住は桁外れである。二一世紀の一〇年あまりのあいだに、主要な都市の一角は、あつという間に漢字で溢れるようになった。北京のアフリカ展示は、グローバルな社会経済情勢を語るもうひとつの現場であるように思う。